

(人物紹介) 港川人の発見者・^{おおやませ い ほ}大山盛保の軌跡

山崎 真治¹⁾

Biography of Mr. Seiho Oyama Who Discovered the Minatogawa Man.

Shinji YAMASAKI¹⁾

はじめに

筆者は、平成24年度沖縄県立博物館・美術館×八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館合同企画展「大山盛保生誕100年記念 発見への情熱」を担当し、1万8千年前の旧石器時代の人骨化石として知られる港川人の発見者、大山盛保氏の事績について系統的に調査、展示する機会を得た。その要点については展示会図録（沖縄県立博物館・美術館2012：以下、「図録」と略す）ならびに大山盛保生誕100年記念誌（大山盛保生誕100年記念誌刊行会2012：以下、「記念誌」と略す）にまとめられているが、紙数の制約上、取り上げることのできなかった事柄も多く、冊子の刊行後に知り得た情報もある。そこで、本稿では改めて大山盛保氏の事績について、上記二篇の冊子において触れ得なかった点を中心に、二三私見を加えつつまとめておきたい。

なお、今回の執筆にあたっては、大山盛保氏の実弟盛和氏による記録（北中城村史編纂委員会2001）を全面的に参考にしたほか、ご子息の大山盛弘氏（OK 運輸合資会社社長）、大山盛稔氏、大山盛正氏、さらに大城逸朗氏（おきなわ石の会）、馬場悠男氏（国立科学博物館）、小田静夫氏、橋本真紀夫氏（パリノ・サーヴェイ）には貴重な資料を提供していただくとともに、さまざまな形で情報提供いただきました。また、大山盛保氏とともに1970年の港川人の発掘に携わられた山城光則氏には、筆者らのインタビューに快く応じていただき、ラジオ沖縄の金城奈々絵氏には大山盛保氏のインタビュー音声を提供していただきました。萩尾俊章氏（沖縄県

教育庁文化財課）には民政府記録等の史料について、三嶋啓二氏（バグハウス）にはバックナーヴィルについてご教示いただきました。このほか、沖縄県立博物館・美術館の関係者をはじめ、数多くの方々にさまざまな形でお世話になりました。関係各位のご高配に心より厚く御礼申し上げます。

生い立ち

大山盛保氏は1912年11月2日、大山盛善、カメの長男として中城村（現 北中城村）大城に出生した。大山氏の一族は、琉球史の英雄として知られる護佐丸を始祖とする由緒正しい家柄であった。大山氏は常々、自身が護佐丸の子孫であることを誇りにしており、後年、自身のルーツにまつわる関心が、歴史や考古学に興味をもつきっかけとなり、港川人の発見につながったと述べている（たとえば大山1996）。大山氏の実家は中城城跡の目の前にあり、その実家跡には2012年12月23日、大山氏の生誕100年を記念し、「大山盛保生誕之地」碑建立期成会によって記念碑が建立された（「大山盛保生誕之地」碑建立期成会2012）。

カナダ時代

カナダへ

大山氏は尋常高等学校卒業後、家族とともにカナダに移民した。

1927年5月、両親と弟の4名で那覇港を出港し、鹿児島港に上陸した後、汽車で福岡、下関を経由して神戸に向かった。神戸から、当時大阪商船のタコ

1) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Omoromachi 3-1-1, Naha-shi, Okinawa, 900-0006 Japan.

マ航路に就航していたあらびあ丸に乗船し、2週間ほどかけてカナダのブリティッシュ・コロンビア州 (Province of British Columbia：以下 BC 州と略す) バンクーバー島のビクトリア (Victoria) に上陸した。6月6日のことであった。

大山盛保氏の父盛善氏は、この10年前にカナダに渡航して製材工場に勤めており、1927年には家族を呼び寄せるため一時帰国していた。一家はビクトリアの対岸にあるバンクーバー (Vancouver) に3か月ほど滞在し、その後バンクーバーの南約30 km に位置するホワイトロック (White Rock) に移った。しかし1928年頃は非常に不景気で、仕事も少なかったようである。1930年10月には、ホワイトロックの東に位置するラングレイ (Langley) のカグラン (Coghlan) に移り、伯父 (父の兄) 大山盛志氏が所有していた山林を苦労して開拓し、農園を開いた。この間の暮らしは楽なものではなかったが、農園でのイチゴの栽培が当たって、成功するまでになったと盛和氏は述べている。

2度の帰国と運送業開業

1935年に初の帰国の機会を得た大山氏は、7月27日にバンクーバーを出港し、8月7日に横浜港に到着した。その後、横浜や名古屋、小倉、鹿児島など各地を見物し、9月5日に那覇港から沖縄に上陸した。この帰国の際に、大山氏は祖母のトーカチ (米寿) をお祝いしている。そして、翌1936年5月25日には那覇港を出港し、横浜からハワイ経由でカナダに帰国した。その後、1937年3月にはフォード2トン車トラックを購入し、翌月 BC 州のライセンスを取得して運送業を開業、農園で栽培したイチゴやアスパラガスの出荷も手掛けるようになった。1940年10月には再びバンクーバーから日本郵船の氷川丸に乗船し、横浜に帰国、10月には沖縄に帰郷した。そして戦争の足音迫る41年2月、再びカナダに渡航した。

戦時下のカナダで

1941年12月8日未明 (カナダでは7日)、日本軍のハワイ真珠湾攻撃によって太平洋戦争の戦端が開かれると、翌年2月にはカナダ在住の日本人に対して海岸沿いの地域 (防衛地帯) からの退去が命じら

れ、内陸部に強制収容された。大山氏家族も農園の土地や栽培していた作物も没収され、家族は離ればなれとなって内陸部の強制収容所に送られた。

その後、内陸部のアルバータ州 (Province of Alberta) などのビート (砂糖大根) 農家などで働くなら、収容所を出て家族と共に移ってよいとのことになり、1942年6月大山氏家族はアルバータ州レスブリッジ (Lethbridge) の東約10 km にある、国境近くの町コールデル (Coaldale) で再会し、ビート作りに従事した。わずかな賃金で広大な面積の耕作に従事させられ、非常にきつい仕事であったと盛和氏は述べている。その後、ロッキー山中の製材所などで勤務した後、1944年10月には自動車修理工場コールデルモータース (Coaldale Motors) に就職することができた。

アメリカ統治下の沖縄で

帰国

終戦後の1946年6月15日、大山氏はバンクーバーからアメリカの輸送船ゼネラル・メーダに乗船し、同月27日横浜に上陸、久里浜の収容所に到着した。その後、土浦 (茨城県) や名古屋に滞在した後、9月17日に中城村久場崎に上陸、沖縄に帰還した。その数日後、久場崎にあった引揚収容所の食堂で、兵隊に「仕事が欲しくないか」と声をかけられたのをきっかけに、当時収容所の隊長であったポスト中佐 (Lt. Col. Wesley V. Post) の下で収容所の管理人として働くことになったと言う (ラジオ沖縄インタビュー)。ポスト中佐は、インヌミ収容所にも関わっていたようである (沖縄市1995：225頁に彼の写真が見える)。同年に実弟盛和氏も帰国し、米軍のジープ修理の監督と通訳を務めることになった。

那覇港湾労務所

久場崎の収容所が12月に閉鎖された後、大山氏はポスト中佐とともに那覇港湾労務所建設係に配属され、那覇市奥武山に移った。戦後まもなく、那覇港での荷揚げなどの港湾作業には日本軍の捕虜がかり出されていたが、続々と本土に帰還したため、米軍政府が沖縄民政府に命じて那覇港湾荷役作業隊を編成し、その総支配人には国場幸太郎氏が任命された (国場組社史編纂委員会1984 (第1部) 81—85頁)。

ポスト中佐と大山氏は半年間、この港湾作業隊の育成や住宅建設にあたった。当時、那覇市街は米軍占領下にあり、立ち入りが制限されていたため、作業隊員は那覇港近隣の奥武山周辺に居を構えたが、その際にこの居住地区の名称をめぐって米軍と沖縄民政府との間で問題が起きた。当時の志喜屋孝信知事は、地名通り「山下町」の名称を提案したが、「山下」の名が「マレーの虎」と呼ばれた山下奉文^{ともゆき}中将を連想させるとのことで、米軍司令官の許可が下りなかった。そこで、大山氏が沖縄と深い関わりのあるアメリカ人、ペリーの名前をつけてはどうかと提案し、これが認められた（ラジオ沖縄インタビュー）。なおこの頃、沖縄民政府の軍民連絡会議録には1947年4月10日（296頁）、4月15日（297－298頁）などにポスト中佐の通訳として大山氏の名前が見える（沖縄県教育委員会1988）。

バックナーヴィル

1947年6月、大山氏はポスト中佐とともに、南城市（旧佐敷村）津波古・小谷・新里に設置された米軍住宅地区バックナーヴィル（Bucknerville）に移り、約800名の沖縄労働者の総支配人としてポスト中佐を補佐した。バックナーヴィル時代の大山氏の業績を紹介した英字新聞には「made significant contributions toward better employee-employer relations.」と記されている（大山盛弘氏提供・紙名不明）。また、1947年に当時の津波古区長が、軍政府副長官のクレグ大佐に馬天地区に出されていた家屋の新築中止命令の解除を要請した際、ポスト中佐とともにその実現を支援している（津波古字誌編集委員会2012：70頁）

またこの頃、実弟盛和氏はバックナーヴィルにコンセットを与えられ、民間人としてはじめて自動車の修理工場を開業した。盛和氏の英語名はジミーだったことから、修理工場は「ジミーズ・グラージ（Jimmy's Garage）」と呼ばれ、米軍関係者を相手に繁盛した。

モーラス船舶解体会社

1949年6月には、米軍政府が知念から那覇に移転し、大山氏は香港に拠点を置くモーラス船舶解体会社（Mollers Suidah Shipbreakers Ltd.）沖縄支

店の沖縄従業員総支配人となった。当時、中城湾には多数の難破船があり、その解体作業を請け負った。

OK 運輸合資会社

モーラス船舶解体会社での上官であったモラー大佐は、大山氏がカナダで運送業に携わっていたことをよく知っていた。大佐は、沖縄での任期が切れて離任する直前、知事あてに大山氏の運送業起業を推薦する書面を提出したが、当時の民政府は十分な対応ができなかったようである。米軍からは民政府に対して再三回答の要求があり、大山氏自身にも「どうするのか」という問い合わせがあった。そこで、兄弟で会社を立ち上げる決断をした大山氏のもとに、米軍から自動車が届いたという連絡があり、大山氏は牧港まで車を取りに行き、自分で運転して帰ってきた。ふと見ると車のガラス窓には「検査OK」と書いてあった。そこで、会社の名前は「OK 運輸」に決まった（ラジオ沖縄インタビュー）。OK 運輸合資会社は1950年1月に発足した。なお、このOKの名称は「大山兄弟」という意味にも通じていたと実弟盛和氏は述べている。設立当初は運送業と自動車修理を手掛けていたが、1951年には当時琉球列島への石油供給権を独占していたカルテックス（CALTEX）社の依頼を受けて、沖縄の民間給油所第1号となるOK 泊給油所を那覇市泊に開設した。給油所は車社会の到来を迎えて繁盛し、その後1953年には嘉手納給油所、1955年には北谷給油所が開設された。

沖縄住宅公社

OK 運輸創業後まもなく、1950年4月には沖縄住宅公社が設立され、大山氏は総支配人に任命された。住宅公社については中島親寛氏らによる詳細な研究が公表されており（中島ほか2003）、公社の実態を知る上で大変参考になるものである。大山氏が1953年2月に住宅公社総支配人を退任するまでに建設された住宅は400棟あまりにのぼった。

当時、大山氏が所有していた三輪車では、泡瀬の建設現場まで那覇から片道2時間、往復4時間もかかっていた。これでは仕事ができないとクレームをつけたところ、早速マッカーサー司令部から自動車20台が送られてきたという。住宅公社の従業員は沖

縄中から集められていたが、このおかげで、知念あたりでも送迎ができるようになった（ラジオ沖縄インタビュー）。

Made in Ryukyu のカメラ

大山氏は戦後の焼け野原となった沖縄には産業が必要だという信念から、カメラや望遠鏡、双眼鏡などの光学機器の制作を沖縄で初めて手掛けた。事業は日本光学工業（現在の株式会社ニコン）と提携して実施され、日本光学から派遣された社員が沖縄に駐在して技術指導にあたったという（大山盛弘教示）。Made in Ryukyu のカメラとして知られる New Pax については、1987年11月6日付週刊レキオ（週刊レキオ社 1987）に詳しく特集されており、このカメラが1968年のプラハの春と港川人骨の発見という歴史的瞬間をとらえたことが紹介されている。

港川人の発見をめぐる

港川フィッシャーの発見

戦後の沖縄で実業家として成功をおさめた大山氏が、港川の採石場で化石の調査を手がけるようになったのは1967年11月、55歳の時であった。港川人の発見に至る経緯については、大山氏自身による記録がある（大山1996）。1967年11月1日、大山盛保氏は自宅の庭に運び込まれた栗石の中から動物の化石を発見し、その翌日、石の出所を求めて具志頭村（現八重瀬町）港川の採石場にたどりついた。採石場の崖面には大きな割れ目（フィッシャー）があり、その中にたまった土の中に多数の動物化石が含まれていることを発見した。なお、大山氏が港川フィッシャーを発見した日付については資料によって若干の相違があり、「記念誌」掲載の資料1、資料3では11月2日とされ、大山（1996）では11月1日のうちに現地に赴いたと記されている。大山氏の手帳には11月1日に「港川石より化石発見」、11月2日に「首里石嶺農地の石より化石再発見」、11月4日に「港川へ化石発掘へ」と記されているので（「記念誌」：6頁）、遅くとも11月4日には港川の現地が突き止められていたことは確かである。

ところで、旧石器（更新世）人骨の研究とは直接関係しないが、大山盛保氏による港川フィッシャー遺跡の発見に先立って、八重瀬町（旧具志頭村）港

川に遺跡が存在することを多和田真淳氏が記載している（多和田1960）。それによれば、港川遺跡は1955年に発見され、「後期上半に属する湮滅遺跡」とされている。大山盛保コレクション中には、港川出土とされる数点の土器小片（縄文後期以降のものと見られる）、石器または石材、海産貝（シャコガイ、サザエ等）が含まれており、喜舎場朝敬氏収集資料にも砂岩製の石器が含まれていることを大城逸朗が報告している（大城 2004）。このように、個々の遺物の帰属時期を特定することは難しいが、フィッシャー上部には明らかな文化遺物が包含されており、この場所が遺跡であったことを物語っている。

11月1日の発見後、11月14日に港川から発見された化石の鑑定を多和田真淳氏（琉球政府文化財保護委員会）に依頼したところ、「1万年前から2万年にかけてのシカの化石である」とのことであった（1967年11月15日琉球新報）。記事によれば、この時点で大山氏はすでに人骨の発見を意識しており、「ぜひ人骨をみつけてみたい」と語っている。1960年代には、多和田真淳氏らによって沖縄各地で絶滅シカ類の化石産地から人骨化石や「骨器」等が発見されており、新聞等でも人骨発見が報道されていた（たとえば長嶺2012、山崎・藤田2012）。また1962年には高宮廣衛氏によって山下町第1洞穴遺跡の発掘調査が行われ、後年非人為と結論づけられることになる「叉状骨器」が多数発見されていた（高宮1968）。大山氏もそうした情報を通じて、発見を意識したのかも知れない。

続く11月25日の琉球新報記事では、港川で見つかった化石はイノシシのものであることが報道された。高良鉄夫氏（琉球大学教授）のコメントが掲載されているので、高良氏が鑑定したものであると思われる。コメントでは「琉球列島では今日まで貝塚構築以前、すなわち化石としてイノシシの骨の明確な出土をみないことから、沖縄のイノシシは民族の移動に伴って南方から家畜化されたものが移入されたとみなされていた。今回発見されたイノシシの化石が貝塚構築以前のものであるならば興味ある問題が提起される。明確な時代鑑定が必要である」と述べられている。なお、沖縄におけるイノシシ化石の初見は石垣島の轟川から採集されたもので、1965年にフォスターによって記載された。このイノシシ化石からは8500

±500 BP(W-588, U. S. Geol. Survey)という年代値が得られている (Foster 1965: 83頁)。

大山氏は多忙な中、暇を見つけては港川の採石場に通いつづけ、家族や社員の協力を得て発掘を行った。

最初の人骨発見

幸運は早々にやってきた。翌1968年1月21日、最初の人骨が発見され、25日には琉球新報が発見を報じた。同年3月17日にも人骨が発見され、19日には東京大学理学部の鈴木尚氏に面会して人骨の鑑定を依頼した。3月20日の琉球新報には「一万年前の人骨化石発見」という見出しで鈴木尚氏のコメントも紹介されている。その後、3月27日にも人骨が発見されたが、年代決定の指標となるような遺物は発見できず、人骨の帰属年代を確定することはできなかった。しかし、大山氏は看護学校まで足を運び、港川の人骨と現代人の人骨を比較し、両者が大きく異なっていることを確信したという(「記念誌」：資料3)。また、大腿骨や脛骨の骨幹部断面を調べて縄文人骨と比較するなど(「記念誌」：資料5)、学者さんごらの研究を独力で実施している。この1968年に大山氏によって発見された一群の断片的な人骨は、1970年に発見された4体分の全身骨格を含む人骨群とは区別して、上部港川人と呼ばれている。両者を区別する理由は、上部港川人の方が港川人よりも上部から発見され、年代的にも新しいのではないかと考えられたためであるが、その妥当性については現在も議論が続いている(たとえば松浦2012)。

その後、1968年12月から翌1969年1月にかけて、沖縄洪積世人類遺跡調査団による第2次調査として、那覇市山下町第1洞穴遺跡と港川フィッシャー遺跡が発掘された。山下町ではシカ化石包含層(VI層)中から子供の人骨が発見されたが(報告では人骨はVI層直上のV層に由来するものと解釈されている)(高宮ほか1975)、港川では良い成果をあげることができなかった(ただし2011年には、この際の出土品の点検中に人骨(寛骨)が再発見された(諏訪ほか2011))。山下町については、人骨出土層準上位のIII層から採取された木炭で放射性炭素年代測定が実施された結果、 32100 ± 1000 BP (TK-78) という年代値が得られ、沖縄で初めてシカ類化石や人骨が

更新世にさかのぼることが理化学的手法によって示された。その結果は渡邊直経氏より1970年5月10日付けの書簡で沖縄考古学会にも伝えられた(友寄1970: 註17)。

1970年6月には、慶応義塾大学で九学会連合のシンポジウムが開催され、沖縄における洪積世人類遺跡の調査(渡邊直経)、地質・古生物学より見た沖縄の洪積世遺跡(土隆一)、沖縄洪積世人類について(鈴木尚)の発表が行われた。そしてその討議の中で、港川フィッシャーと人骨は、「まだ洪積世のものと断定する事はできない」と評価されたという(大山1996)。こうした学会の場において、年代の明らかになっていない港川の位置づけが保留されたのは、アカデミズムの立場としては当然のことであった。一方、大山氏はこの発言に納得できなかったようで、さまざまなメモ書きや記事でも繰り返しこの出来事を取り上げている。しかし、こうした学者の見解を前にしても、フィッシャーの深部から発見されたイノシシ化石や人骨は、きっと古い時代のものに違いないという大山氏の信念は、いささかも揺らぐことはなかった。

港川人の発見

もっと確実な証拠が必要だ、大山氏がそうように考えたかどうかはわからないが、1970年7月には、1968年の人骨発見以降、足が遠のいていた港川フィッシャーを再び訪れ、発掘を開始した(図1)。その直後の8月10日には、再び人骨(頭骨・下顎骨)を発見し、東京大学の渡邊氏に調査を要請した。8月12日付の琉球新報によれば、「10日午後採石現場でダイナマイト爆破を行ったら、そのあとから人の頭がい骨らしいものが出てきた」と記されている。人骨発見の連絡を受けて、8月20日に現地を訪れて人骨を調査した渡邊直経氏は、人骨の出土層準に木炭が散在しているのを認め、これを試料として放射性炭素年代測定が行われた。その結果は 18250 ± 650 BP (TK-99) というもので、同年12月から翌年1月にかけて実施された第3次沖縄洪積世人類遺跡調査団(団長：田辺義一)による港川フィッシャーの発掘直前に判明したと渡邊氏は述べている(渡邊1973)。大山氏は1970年11月2日にも人骨一体分(港川人1号)を発掘しており、その直後に行われ

た第3次沖縄洪積世人類遺跡調査団の発掘調査でも少量の人骨が回収された。1号人骨の発見に立ち会った山城光則氏によれば、1号の頭骨はほぼ完全な状態で発見されたため、一目見て人骨だとわかったと言う（山城氏へのインタビューによる）。なお、大山氏はこの間の1970年9月27日に、知念村（現 南城市）クルク原において大型リクガメの上腕骨を採集している（「記念誌」10頁）。このリクガメは、その後、発見者の大山氏を記念して「オオヤマリクガメ」と名づけられ、2003年には高橋亮雄氏らによってムツアシガメ属の新種として「*Manouria oyamai*」と命名された（Takahashi et al. 2003）。

以上のような1970年8月～1971年1月にかけての一連の調査によって、今日港川人として知られる4体分の全身骨格を含む人骨群が発見された。渡邊氏は、以上の成果を（渡邊1971）において速報し、追記において港川で得られた 18250 ± 650 BP(TK-99)の年代値についても言及している。また、第3次沖縄洪積世人類遺跡調査団による調査終了直後の1971年1月9日、琉球政府立博物館で開催された第3回沖縄考古学会研究発表会席上で、渡邊氏、土氏、鈴木氏によって報告された（この発表会の講演録が渡邊1973、土1973である）。さらに、1971年3月8日付けの朝日新聞には、鈴木尚氏が「沖縄の洪積世人類」と題した記事を寄稿し、「港川人」、「山下洞人」の名称を用いて、調査成果の概要を総括している（「記念誌」49頁）。港川人については、1982年の報告（Suzuki and Hanihara 1982）で 16600 ± 300 BP (TK-142) の年代値も報告されているが、この年代値は、鈴木氏の朝日新聞記事から第3次調査団による調査時の採集品にもとづくものであったと推定される。

以上のように、最終的に港川フィッシャーからは4体分もの全身骨格を含む人骨群が発見され、その年代は、更新世にさかのぼることが理化学的に示された。大山盛保氏の信念が、学術的に証明されたのである。

港川人の評価

一般書籍に港川人の名称が登場するのは、1971年に出版された鈴木尚氏の『化石サルから日本人まで』（鈴木1971）が最初のものである。また、1982年に

港川人に関するレポート（Suzuki and Hanihara 1982）が発表されると、多くの一般書籍、雑誌等に港川人が取り上げられるようになるとともに、以下の展示会において港川人骨の実物が公開された。

- 「日本人はどこから来たかー日本人の起源展」（国立科学博物館1988） 港川人骨の初公開
 - ・会場：国立科学博物館
 - ・期間：1988年7月16日～8月31日
- 「琉球文化秘宝展」（「歴史をひらく・琉球文化秘宝展」実行委員会 1991） 沖縄での初公開
 - ・会場：沖縄三越
 - ・期間：1991年10月1日～20日
- 「日本人はるかな旅展」（国立科学博物館ほか2001）
 - ・会場：国立科学博物館
 - ・期間：2001年9月18日～11月11日
- 「港川人展ー元祖ウチナーンチュ」展（沖縄県立博物館 2002）
 - ・会場：沖縄県立博物館
 - ・期間：2002年8月20日～9月29日
- 「人類の旅ー港川人の来た道」展（沖縄県立博物館・美術館 2007）
 - ・会場：沖縄県立博物館・美術館
 - ・期間：2007年11月1日～2008年1月20日
- 「新収蔵品展ー平成19年度収蔵資料」（沖縄県立博物館・美術館 2008）
 - ・会場：沖縄県立博物館・美術館
 - ・期間：2008年5月13日～6月23日
- 「大山盛保生誕100年記念 発見への情熱」（具志頭会場）
 - ・会場：八重瀬町立具志頭歴史民俗資料館
 - ・期間：2012年10月23日～2013年1月20日

こうした港川人の展示公開と平行して、1994年には沖縄県教育委員会刊行の『高校生のための沖縄の

歴史』（沖縄県教育委員会編1994）に港川人が取り上げられ、2003年に刊行された『沖縄県史各論編2 考古』（沖縄県教育委員会2003）でも、港川人や沖縄の旧石器時代について詳しく扱われている。また、1991年埴原和郎氏によって提案された日本人集団の形成史に関する二重構造モデル（dual structure model）（Hanihara 1991）では、港川人に関する研究成果が重要な論拠となっており、以後の日本人のルーツに関する一般書籍等では、必ずと言ってよいほど港川人が取り上げられている。2006年にはナショナルジオグラフィック誌（The Greatest Journey 特集）にも18000年前のホモ・サピエンス人骨出土地として港川が取り上げられ（National Geographic 2006）、現在（2010年度）では、高校日本史教科書（日本史B）のほぼ全てに、港川人が取り上げられている（新城2010）。

大山氏の数々の学界への功績を記念して、1995年には日本古生物学会より貢献賞が贈られた。晩年を迎えても、化石に対する情熱はいささかも衰えることはなく、各地の露頭に足を運び、自身でイノシシ骨格の比較標本を収集して、沖縄のイノシシのルーツ解明に取り組んでいたと言う。そして1996年7月16日、大山盛保氏は沖縄の人類学、考古学、古生物学研究に情熱を燃やしつつ、この世を去った。享年83歳であった。没後、生誕100年にあたる2012年には、氏の功績を記念して日本人類学会より功労賞が授与された。

発見と学術の相克

経済人としての成功と学術的な大発見に彩られた大山氏の生涯は、貧しい幼少期に夢見た伝説の地トロイアの存在を、自らの発掘によって立証したドイツ人の富豪、シュリーマンの生涯にも重なって見える。特に、大山氏が化石の調査研究を手がけるようになったのは55歳の時であったが、このような年齢で全く新たな分野にチャレンジし、成功を収めることは並大抵のことではない。

ところで、こうした大きな発見が学術の発展に寄与することは紛れもない事実であるが、そうした発見が学術の世界に受け入れられるためには、相応の時間と証拠の積み重ねを要することもまた事実である。相澤忠洋氏によって発見された群馬県岩宿遺跡

の旧石器が、学界に受け入れられるまでには、多くの研究者を巻き込んだ激しい論争が繰り広げられ、大山氏が発見した港川の人骨も、すぐに学界に受け入れられたわけではなかった。

港川の場合は、大山氏の信念が研究者を動かす形で証拠が積み上げられ、評価が定まっていた。岩宿遺跡の旧石器もまた、旧石器時代と縄文時代の境界についての理化学的年代が蓄積していくにつれて、学界に受け入れられていった。こうした事例を垣間見るだけでも、旧石器時代研究において放射性炭素年代測定に代表される、理化学的年代測定法が及ぼした影響がいかに甚大なものであったかがよくわかる。現在でも、日本の旧石器時代研究では放射性炭素年代測定法は欠かすことのできない重要なツールとなっている。

大山氏は、港川の採石場にひたむきに通い続け、信念と情熱をもって化石に向き合い、結果的にアカデミズムの世界に新たな風を吹き込んだ。旧石器時代の沖縄に、ユニークな特徴をもつ人々が到達していたこと、シカ類などの絶滅種とともにイノシシなどの現生動物も旧石器時代の沖縄に分布していたことなどは、大山氏の発見を通して我々が知りえた歴史的事実である。こうした土台の上に、現在の沖縄の旧石器時代研究があり、沖縄県立博物館・美術館が実施している人類学・考古学的調査研究も位置づけられる。近年では石垣市白保竿根田原洞穴遺跡（片桐ほか2011）や南城市サキタリ洞遺跡（山崎ほか2012）などで新たな人骨化石が発見されているが、港川人に匹敵するような保存の良い人骨は未だに発見されていない。しかし、次々に発見される新たな証拠は、旧石器時代人としての港川人の位置づけを補強しており、その価値はますます高まっていると言えよう。

おわりに

生前、大山氏は自身のことを自然主義者であると述べていた（ラジオ沖縄インタビュー）。富や名声を自ら求めたわけではない。大山氏にとって、それらは戦後の沖縄の復興を願い、沖縄の過去そして未来を見極めようとした自身の行動の結果に過ぎないものであった。その情熱とひたむきさに強くひきつけられるものを感じるの、私だけではないだろう。

本稿が、大山氏と港川人の発見について学ぼうとする方々にとって、少しでも手助けとなる部分があれば幸いである。

また、大山氏は生前、港川フィッシャー現地の保護についても気にかけておられたと言う。現地は私有地となっており、1998～2001年にかけて具志頭村教育委員会が重要遺跡確認調査として4次にわたる発掘を実施し、いくつかの点で新たな事実が明らかとなったが、目的とした更新世の人骨や石器は発見されなかった（具志頭村教育委員会2002）。しかし、大山氏の生誕100年にあたる2012年に八重瀬町が現地を買い上げて保護する方針を示し、遺跡の保護についても一定の見通しが得られたことは大変喜ばしいことである。

最後に、大山盛保氏の業績が末永く顕彰されていくことを祈念して、本稿を閉じたい。

参考文献

新城俊昭 2010『沖縄から見える歴史風景－探究心を育てるためのもう一つのまなざし』高校日本史教科書Bに記述されている琉球・沖縄 東洋企画

大城逸朗 2004「喜舎場さんとの忘れ難い思い出」『喜舎場朝敬さんを偲ぶ－没後一周年記念』

大山盛保 1996「港川原人との出会い」『群星（5月号）』246 沖縄総合事務局 1頁

「大山盛保生誕之地」碑建立期成会 2012『「大山盛保生誕之地」碑建立記念誌』

大山盛保生誕100年記念誌刊行会 2012『通いつづけた日々』港川人の発見者大山盛保生誕100年記念

沖縄県教育委員会 1988『沖縄県史料』戦後2 沖縄民政府記録1（沖縄県教育委員会 2003『沖縄県史研究叢書』14 沖縄県史料 沖縄民政府記録1（影印本 上））

沖縄県教育委員会編 1994『高校生のための沖縄の歴史』

沖縄県教育委員会 2003『沖縄県史 各論編2 考古』

沖縄県立博物館・美術館 2012『大山盛保生誕100年記念 発見への情熱 図録』

沖縄市 1995『インヌミから－50年目の証言』沖

縄市史資料集5

片桐千亜紀・山崎真治・藤田祐樹 2011「更新世人骨の発見－沖縄県石垣市白保竿根田原洞穴遺跡」『季刊考古学』114 89－90頁

北中城村史編纂委員会 2001『北中城村史』第3巻 移民・本編（大山盛和氏記事：307－315頁）

具志頭村教育委員会 2002『港川フィッシャー遺跡』具志頭村文化財調査報告書第5集

国場組社史編纂委員会 1984『国場組社史－創立50周年記念』第1部・第2部

週刊レキオ社 1987『週刊レキオ（11月6日付）』No. 136

鈴木 尚 1971『化石サルから日本人まで』岩波書店

諏訪 元・藤田祐樹・山崎真治・大城逸朗・馬場悠男・新里尚美・金城 達・海部陽介・松浦秀治 2011「港川フィッシャー遺跡（沖縄県八重瀬町）の更新世人骨出土情報に関する新たな知見」『Anthropological Science』119 125－136頁

高宮廣衛 1968「那覇市の考古資料」『那覇市史 資料編第1巻1』243-393頁

高宮廣衛・金武正紀・鈴木正男 1975「那覇市山下町洞穴発掘経過報告」『人類学雑誌』83 125－130頁

多和田真淳 1960「港川貝塚」『文化財要覧』1960年版 琉球政府文化財保護委員会 35頁

土 隆一 1973「地質学的に見た沖縄の洞穴とその堆積物」『南島考古』3 5－8頁

津波古字誌編集委員会 2012『津波古字誌』

友寄英一郎 1971「沖縄先史地理学序説」『南島考古』2 15-25頁

中島親寛・池田孝之・小倉暢之 2003「戦後の沖縄における沖縄住宅公社による米軍住宅建設プロセスと計画管理技術に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』566 105－111頁

長嶺 操 2012「港川フィッシャー遺跡発掘の頃」『大山盛保生誕100年記念 発見への情熱 図録』沖縄県立博物館・美術館 32－35頁

ナショナルジオグラフィック 2006『人類の大いなる旅』

花崎為継 2010「人物再発見－古代への情熱を燃やしつづけた人－大山盛保さん」『しま』5 北

中城村文化協会 11-13頁

松浦秀治 2012「港川人の年代を考える」『大山盛保生誕100年記念 発見への情熱 図録』沖縄県立博物館・美術館 52-55頁

三嶋啓二 2011「沖縄の戦後を歩く②馬天さんばし通り」『しまたてい』59 沖縄しまたて協会 46-49頁

山崎真治・藤田祐樹 2012「刊行物目録解説」『通いつづけた日々 港川人の発見者大山盛保生誕100年記念』大山盛保生誕100年記念誌刊行会 32-40頁

山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・国木田 大・松浦秀治・諏訪 元・大城逸朗 2012「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の発掘調査 (2009-2011年) - 沖縄諸島における新たな更新世人類遺跡 -」『Anthropological Science (Japanese Series)』120 121-134頁

渡邊直経 1971「沖縄における洪積世人類化石の新発見」『人類科学』23 207-215頁

渡邊直経 1973「沖縄における洪積世人類遺跡の調査」『南島考古』3 1-4頁

Foster, H. L. (1965) Geology of Ishigaki-shima, Ryukyu-retto. Geological Survey Profewssional Paper 399-A.

Hanihara, K. (1991) Dual structure model for the population history of the Japanese. Japan Review. 2: 1-33.

National Geographic (2006) The Greatest Journey Ever told. The trail of our DNA.

Suzuki, H., and Hanihara, K. (1982) The Minatogawa man : the upper Pleistocene man from the island of Okinawa. Bulletin of the University Museum, the University of Tokyo. No. 19

Takahashi, A., Otsuka, H., Hirayama, R. (2003) A new species of the genus Manouria (Testudines: Testudinidae) from the Upper Pleistocene of the Ryukyu Islands, Japan. Paleontological Research. 7: 195-217.

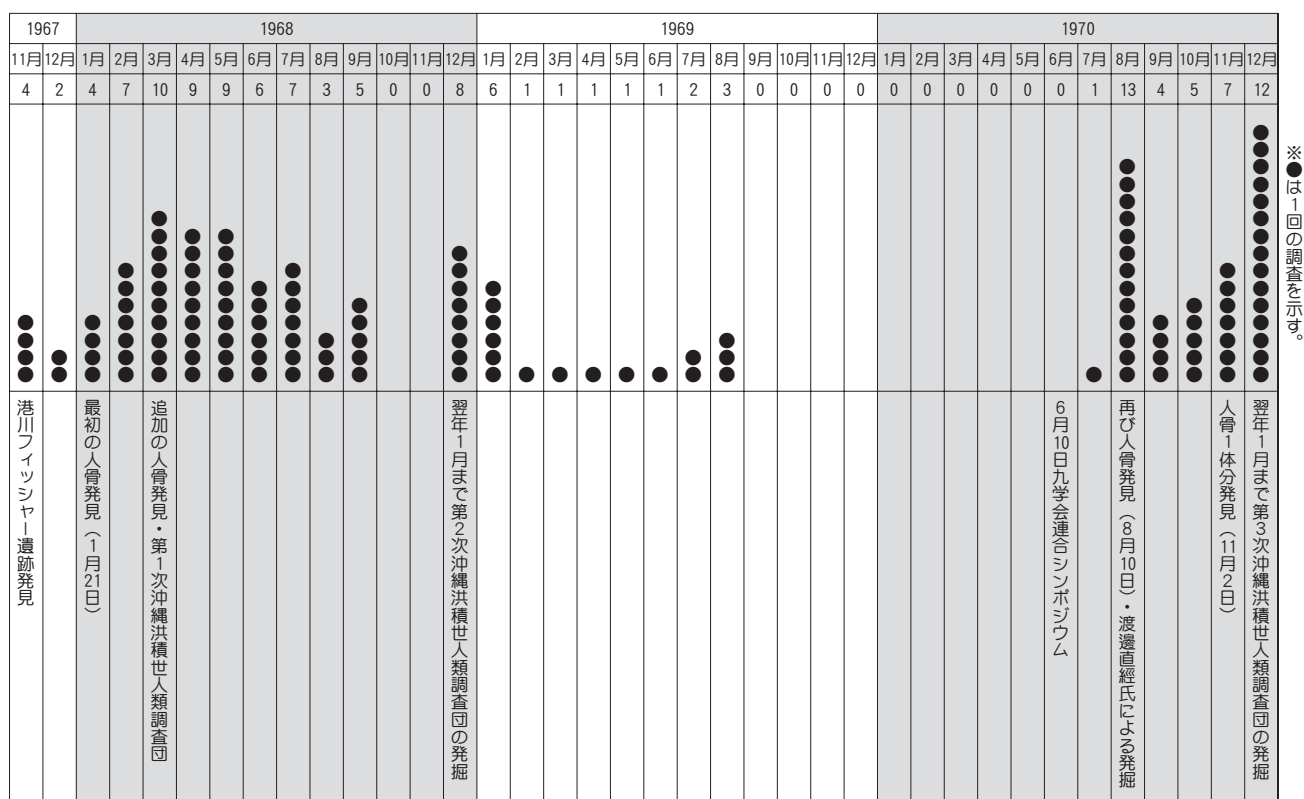


図1 1967～1970年にかけて大山氏が港川フィッシャーに通った回数

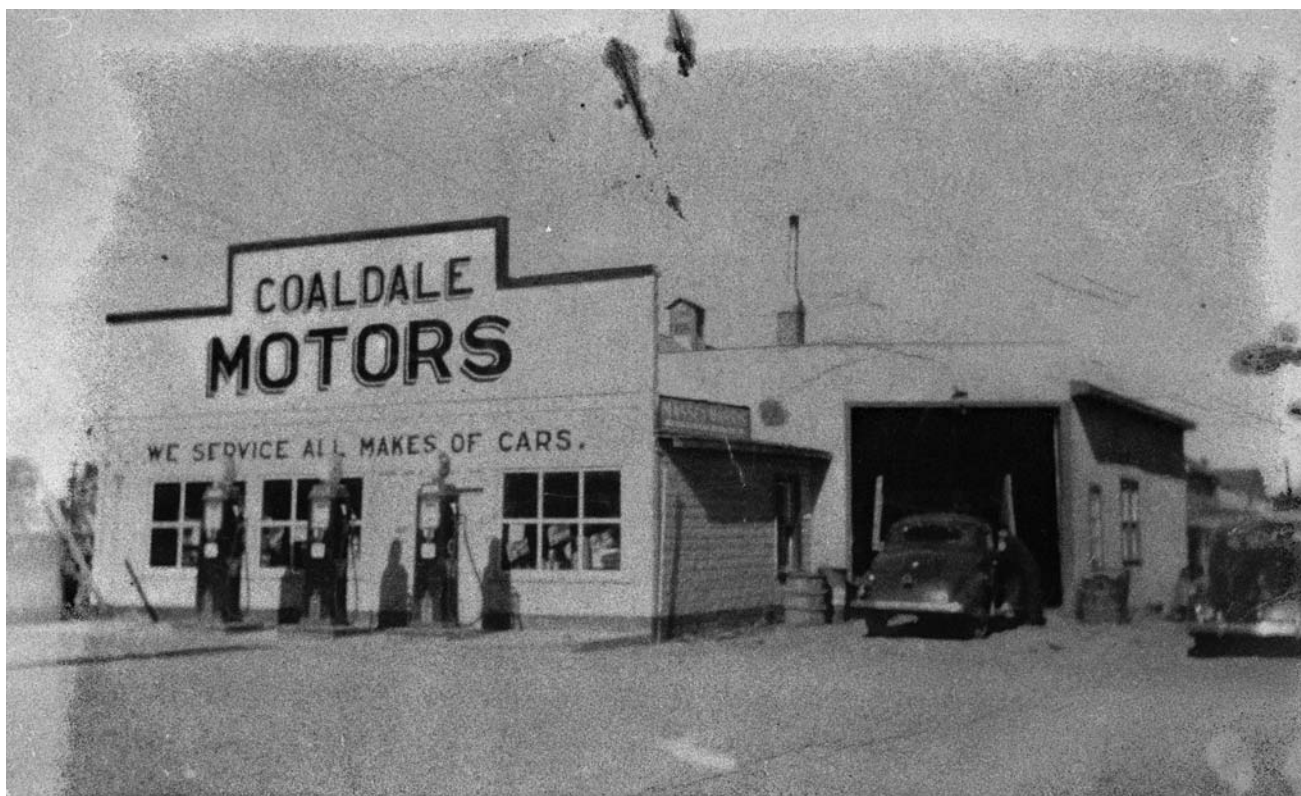


写真1 カナダ時代に大山盛保氏が勤めていた COALDALE MOTORS



写真2 OK 泊給油所 (1954年)



写真3 Dr. Joseph Allen Jr. (中央) による
地質調査の際のスナップ (1970年6月28日)。

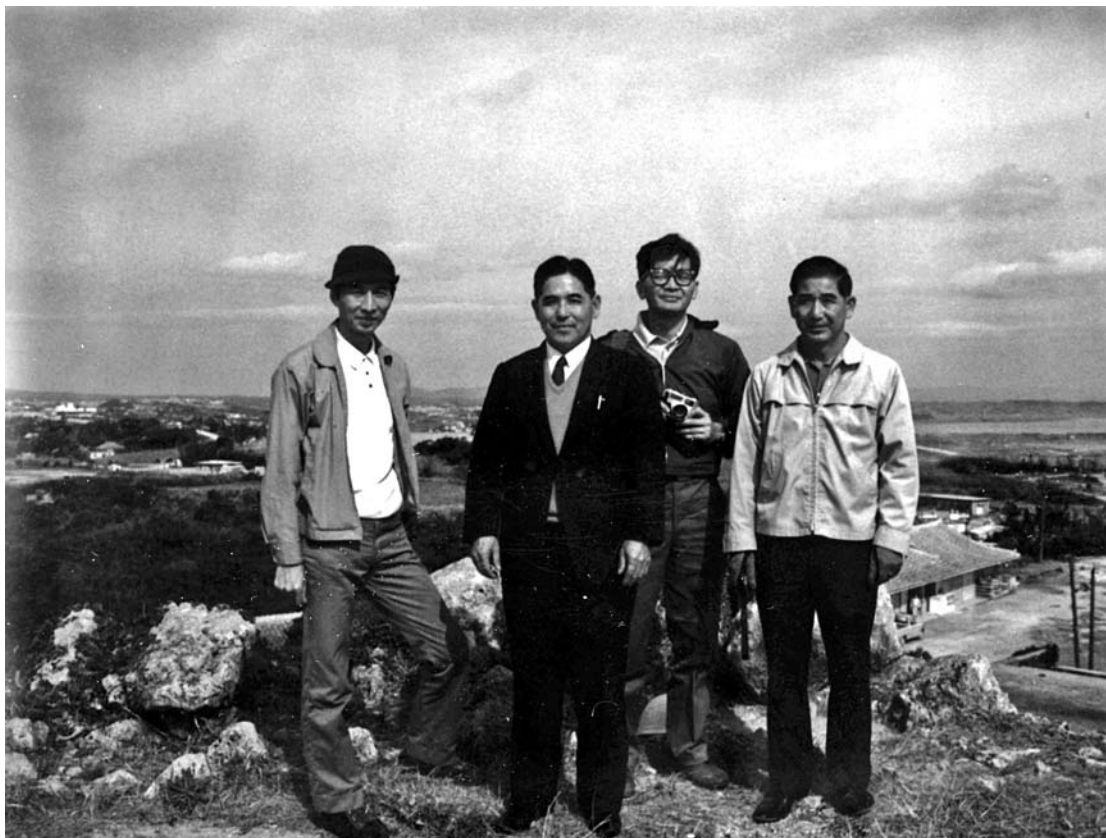


写真4 撮影年・場所不明。右から大山盛和氏、野原朝秀氏、大山盛保氏。

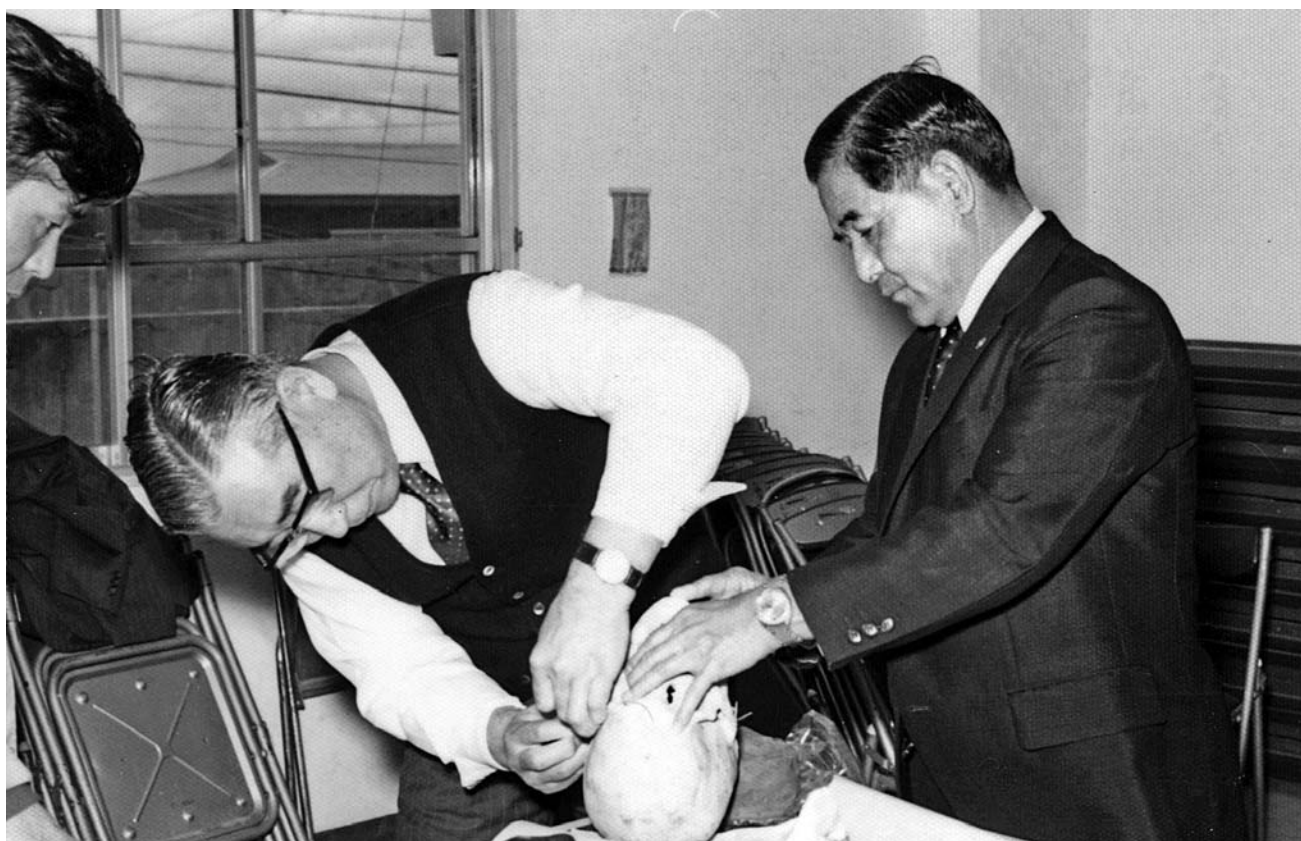


写真5 喜界島の伝俊寛墓出土人骨調査時のスナップ。鈴木尚氏(左)と大山盛保氏(右)(1976年か)

こうして1968年から1970年にかけて、港川採石場の岩の割目から、大山氏は数多くの人骨化石を発見しました。これ港川人です。個体の区別のはっきりしている骨格は、1号性、2号女性、3号女性、4号女性の4体があり、そのほにもいくつかの部分的な人骨があります。

人骨の近くで見つかった木炭の分析によると、港川人の年は1万8000年ほど前と考えられます。このように古い人骨石が数体分も発見されたのは、日本では初めてのことです。



港川人発見当時の大山盛保氏



港川採石場
中央の岩割目から港川人の化石や動物の化石が見つかった。岩の大きさは約10m、割目自体は約10mです。



写真6 「日本人の起源展」(国立科学博物館)会場にて(1988年)。



写真7 社長室にて亀井節夫氏（右）と（1989年4月）。

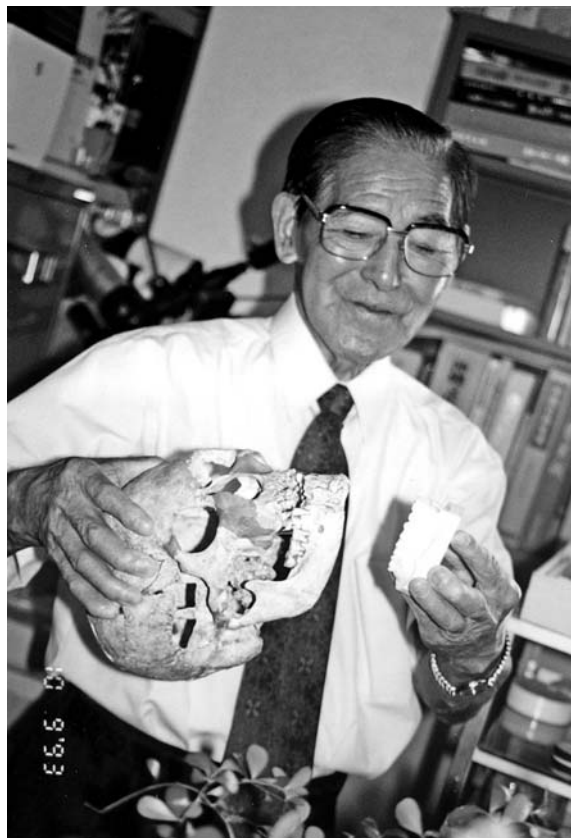


写真8 社長室にて（1993年10月9日）。



写真9 鈴木尚氏（左）と大山盛保氏（右）（1991年か）。



写真10 左から鈴木尚氏、大山盛保氏、馬場悠男氏（1991年か）。